平成２９年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【宮城県】

１実践テーマ	【Ⅰ，Ⅲ，Ⅴ】
２実施対象者	学校名　　大崎市立松山中学校 対象学年　全学年 生徒数　　１６７名
３展開の形式	（１）学校における活動 ①教科・領域名（保健体育，道徳，総合的な学習の時間） ② 行事名（　　） ③ その他（　　） （２）地域における活動 ① イベント名（　　） ② その他　（　　）
４　目　標 （ねらい）	「スポーツのもつ力で心身共に調和的な発達が遂げられる生徒を育てる」 ～ボランティアマインドや共生社会の実現に向けた障がい者への理解を深めるオリンピック・パラリンピック教育を通して～ ・道徳の授業等を活用して，人類愛や思いやりの心などの価値に触れることにより，平和的な社会の実現に進んで貢献する態度を養う。 ・パラリンピックや障がい者スポーツについて学ぶことにより，障がいへの理解と関心を高め，共生社会の実現を目指す生徒を育てる。 ・オリンピック・パラリンピックについての学習を通して，スポーツのもつ力（努力の喜びや道徳的価値，フェアプレー精神，他者への尊敬・理解，忍耐力，卓越性の追求など）を学ぶことにより，心身共に調和のとれた発達を促す。
５　取組内容	１　保健体育の授業「オリンピック・パラリンピックの歴史と今日」 ・「現代生活におけるスポーツの文化的意義」，「国際的なスポーツ大会が果たす文化的な役割」，「人々を結びつけるスポーツの文化的なはたらき」を学習した。 ・オリンピック・パラリンピックの理念，年齢や性，人種，民族，障がいの有無などを越えた世界的なスポーツ大会の在り方を学んだ。 ・オリンピック・パラリンピックに懸ける生徒の思いを，一人一人の手形による五輪の造形で表現したものを階段の踊り場に掲示し，毎日再確認できるようにした。

２　オリンピアン講演会の実施

期日　平成２９年１１月１０日（金）

会場　大崎市立松山中学校体育館

講師　仙台大学　職員　三浦　伸二　氏

１９９８年長野オリンピック　ボブスレー代表（出場なし）

２００２年ソルトレイクシティーオリンピック　ボブスレー代表

（２人乗り，４人乗りの両方で出場）

演題　「オリンピックに出場して」

内容

・ボブスレーを始めたきっかけは，競技人口が少ないからオリンピックに出場できるかもしれないということだったが，入ってすぐ危険な競技だということが分かった。夏場は陸上競技の短距離選手や重量挙げの選手のような練習，冬場は山にこもって滑走トレーニングというように，過酷な練習が必要であった。

・競技を始めて２年目で，運良く長野オリンピック代表に選ばれた。しかし，試合には出場できないという悔しい思いをした。

・長野オリンピックで経験した悔しい思いをバネに，練習方法だけでなく生活についても徹底的に見直し，自分なりに勉強した。大きくは「トレーニング方法の改善」，「メンタルトレーニングの導入」，「食事の改善」を行った。

・その結果，ソルトレイクシティーオリンピックでは，２人乗りと４人乗りの両方で出場を果たした。大会前にけがをし，もっとできたはずという悔しい思いは残ったものの，簡単には得ることのできない興奮や感動を味わうことができた。

・競技を通していろいろな国（９カ国）に行くことができた。特にソルトレイクシティーオリンピックでは，２回目のオリンピックで余裕ができたためか，いろいろな国の選手と交流でき，考え方や文化の違いを知ることもできた。逆に中学校・高校でもっと英語を勉強しておけば良かったということを感じた。

・<u>特にみんなに伝えたいこと</u>

① 今，必要ないと思っていることでも，後で役に立つことが眠っているということや，意外なところで必要になってくるものがあると分かった。

② いろいろな出会いや，人とのつながりを大切にすること。そこにさまざまなチャンスが隠れている。

③ 臆せずに様々なことにチャレンジすること。

④ 簡単にあきらめないで続けること。頑張れば必ず結果がついてくるとは言い切れないが，頑張った先には必ず何かがある。

３　障がい者スポーツ体験的学習の実施

期日　平成２９年１２月２０日（水）

会場　大崎市立松山中学校体育館

講師　車いすバスケットボールクラブ「宮城ＭＡＸ」

ヘッドコーチ　岩佐　義明　氏

菅原　志朗　選手　　萩野　真世　選手

講話

・障がい者スポーツを行っている人たちは，健常者とほとんど変わらない生活を送っている。（日中は働き，その後体育館に行って練習をする。）

・残された身体の能力を最大限に生かして競技をするのが，パラリンピックのねらいである。

・車いすバスケは下肢に障がいがあることから，上肢のみを使って行う競技だが，上肢に障がいがある人も競技ができる。

・障がいが多い人も少ない人も一緒に競技をする。（菅原選手は腹筋・背筋がほとんどなく，障がいが最も重いにもかかわらず活躍している。）

・女子は男子に入って競技ができる。（萩野選手は女子ジャパンのエースで，将来が有望な選手である。普段は小さくても，大きい男子選手に混じって競技している。）

・障がい者は弱者のイメージがあるが，そのようなイメージを払拭したい。

・この競技の大変さも楽しさも，両方伝えたい。

競技用の車いすとルールの説明（菅原選手と萩野選手による模範演技）

・障がいによるハンディをつけるのではなく，同じルールの中で戦う。

・倒れたら自分で起きないといけない。

バスケットボール部員の車いす体験と競技の体験

・ただまっすぐ前に進むことでも難しいことが分かった。また，後ろに進むのはなおさら困難なことだということも分かった。

・シュートは足で踏ん張ることができないので，やってみると大変難しいということが分かった。

・障がい者と一緒にスポーツをすることの醍醐味は，対等な立場や条件でつながりをもてるだけでなく，一緒の気持ちになれるということである。

感想を川柳で表現し，優秀な作品を掲示・表彰して紹介

・最優秀賞　今日を機に　わが夢向かい　一歩ずつ

優秀賞　　共生の　社会へつなぐ　そのシュート　など４作品

４　オリ・パラ道徳実践期間と授業研究

道徳実践期間　１２月４日（月）～１５日（金）

１年生	・オリンピック・パラリンピックとは	
	・夢を求めてパラリンピック	1-(2)希望，勇気，強い意志
２年生	・夢を求めてパラリンピック	1-(2)希望，勇気，強い意志
	・スポーツボランティア	4-(2)公徳心・社会連帯
３年生	・希望の義足	4-(10)日本人としての自覚
	・世界全体が幸福に	4-(2)公徳心・社会連帯

授業研究

実施日　　平成３０年１月１５日（月）５校時
対象学級　第３学年１組
授業者　　教諭　眞山　由子
価値項目　４－（２）公徳心・社会連帯
資料名　　「世界全体が幸福に」
（出典　光村図書「中学道徳３年　きみがいちばんひかるとき」）

６　主な成果

１　各実践から

・いろいろな学習場面を設けたことで自分たちもオリンピックやパラリンピックに参加したいという気持ちを効果的にもたせることができた。
・オリンピアの講話を聞くことで，オリンピックをより身近なものとして捉える生徒が増えた。また，オリンピックという厳しい戦いに臨む際の心構えなどを知り，自分たちの生活に生かそうとする態度を育てることができた。
・スポーツをとおして自分の身近な地域，県などの人々との交流を図りながら，互いを認め合い，理解し合うことができることを体感した。
・車いすバスケットを経験することで，選手の並々ならぬ努力を察することができた。また，選手の様子や話を聞くことで，自分の目標を改めて考え直すことができた。
・障がいをもつ人とのふれ合いにより，改めて障がいをもっている人の考え方や障がい者への見方を変えることができた。
・パラリンピックや障がい者への理解，共生社会への理解が進み，障がい者や社会的に弱い立場の人に自分から進んで声を掛けようという意識，他の人のことを考えて行動したいという意識が向上した。
・世の中に多様な人がいて多様な考えがあることを知り，自分とは違う考えの人がいても，それを受け入れながら共に生活していこうという考えに変わった生徒がいた。

２　アンケートの結果から

※「オリンピック・パラリンピック」についてのアンケート調査
１回目実施：平成２９年　７月１４日（金）
２回目実施：平成２９年１２月２０日（木）
内容：オリンピック・パラリンピック，共生社会，スポーツの力等についての意識調査

	・２０２０年東京オリンピック・パラリンピックへの関心や，どのような大会かという理解が，２回目の方が大幅に向上した。 ・障がい者スポーツへの知識も，２回目の方が大幅に向上した。 ・スポーツが自分に役立つという意識や，オリンピック等で活躍しているアスリート達から学ぶことを記述された数が増加した。 ・障がいのある方と共に生きる社会を実現するためにできることとして記述した数が増加しただけでなく，１回目は「障がいをもっている人が安心して暮らせる社会をつくる」というような漠然とした考えが多かったが，２回目では「障がいのない人と同じ空間で同じように接する」，「偏見をもたないように気を付け，必要なことを助ける」というような具体的な考えが多く挙がった。 ・２０２０年東京大会に向けて果たせることとして記述された数が増加した。
７実践において工夫した点（事業の特色）	・本校は大崎市社会福祉協議会松山支所と結びつきが強く，３年生の総合的学習の時間で行っている福祉体験学習などでも毎年お世話になっている。今回も障害者スポーツ体験学習の際などで大きく関わっていただいた。
８主な課題等	・実際にオリンピック・パラピンピックに自ら参加することや，オリンピック・パラリンピックに向けて自分ができることは様々な手段，方法があるが具体的な手立てを示して実現に結びつけられるように継続して支援していく必要がある。 ・今後も地域や異年齢も含めたスポーツを通した交流ができるようにしていきたい。 ・パラリンピックについてのメディアの取り上げ方が薄いので，教師側が意図的に教えることも必要だった。そのためにも，共生社会のことを含め，教師自身が研修する機会の充実をさらに図った方が，もっと幅広く，深く生徒に指導することができる。 ・障がい者スポーツについての知識は多くなったが，さらにルールについても知識が広げられると，障がい者スポーツそのものの理解が深められた。 ・アンケートの結果から，障がい者と共に生きる積極的で前向きな意識の変容として受け取れる内容については，あまり変化がなかった。
９来年度以降の実施予定	・２０２０年東京大会に向けて，オリンピック・パラリンピックに関することを今後も教科や諸活動等で多く取り入れ，関心を維持・向上させるだけでなく，個人なりにも何らかの参画意識をもてるよう指導・助言を継続していくいく。 ・道徳や総合的学習の時間，及び各教科の中でも，障がい者との関わりについて取り上げ，共生社会への意識をさらに高めていくだけでなく，実現に向けた自己の役割としての前向きな意識をもてるように指導していく。